

アコースティックバンド「テノヒラ」のボーカル 愛南町出身のkikuさんが綴るふるさとエッセイ

— あいなん音故地新 —

「学生生活」

2月26日。国家試験が終わった。そして、間も無く卒業式を迎える(この記事が掲載される頃には卒業式も終え、国試の台否も出とります!!)。三年前から通い始めた鍼灸学校。入学当初は勉強についていくのが必死で、こんな日々が3年間も続くのが、、とちょっとした絶望感にも襲われたけど、振り返るとあつという間やった。

肝心な国家試験の手応え、、本当にどつちに転ぶかわからん状態。ただ、やれることはやっただし、試験直後はあまりの出来なさに記憶がないくらいへこんどったけど、落ち込んだって仕方がない。もう終わったこと。わからん未来に心を砕いてうつむいて時間を過ごすのはもったいない。同じだけ時間が過ぎるなら、一日一日を前向きに過ごしたいって思うようになって、覚悟を決めて春からの二通りの道を考えてる。あだし、少し強くなったかも。

学校で学べることは勉強だけじゃない。先生もクラスメイトも自分の好きな人だけを選んで集めたわけじゃないから、自分とは真逆の考えを持った人もおる。そんな中でも思いあつたり、譲りあつたりしながら、お互い認める。そうすることで自分の新しい扉が開く。限られた環境の中でいかに自分の力を出し切るのが、っていうことも大切。自分の好きなことだけをしてきたあだしにとってはとても貴重な経験になった。

春がきた。どんな花が咲くのが楽しみや。

(テノヒラkiku)

あいなん物産探訪 その②

「サツキマス」

愛南漁協青年漁業者
連絡協議会



▲中田知公会長(左)と大西光さん

天然下での個体数が極めて少ないことから、幻の魚とも言われるサツキマス。その養殖プロジェクトが愛南町で進んでいる。取り組むのは、愛南漁協や同青年漁業者連絡協議会(青年協)、愛媛大学南予水産研究センターなどだ。

サツキマスは、日本固有種で西日本の河川などに生息する。海に下ればサツキマス、一生を淡水で過ごせばアマゴと呼ばれる。降海するのは、ほとんどが雌だ。小さい雌は、エサを求めて海に下る。しかしそこで川にいたときの何倍にも成長するのがおもしろい。

アマゴは、完全養殖技術を持つ町内のNPO法人

「ハートinハートなんぐん市場」が生産する。

それを青年協が養殖し、愛南漁協が販売することで、ふ化から出荷まですべて町内で



こちらから愛媛CATVの動画がご覧いただけます

担う「純愛南産」の養殖魚が誕生した。

プロジェクトは今年で4年目。4月の出荷に向けて青年協の中田知公会長は「今年は今までの^{ともりの}なく順調」と胸を張る。その味は「ほどよく脂がのって軟らかく、上品な甘みがある」という。この春はぜひ、幻の魚を味わいたい。

